

第三學年兒童用

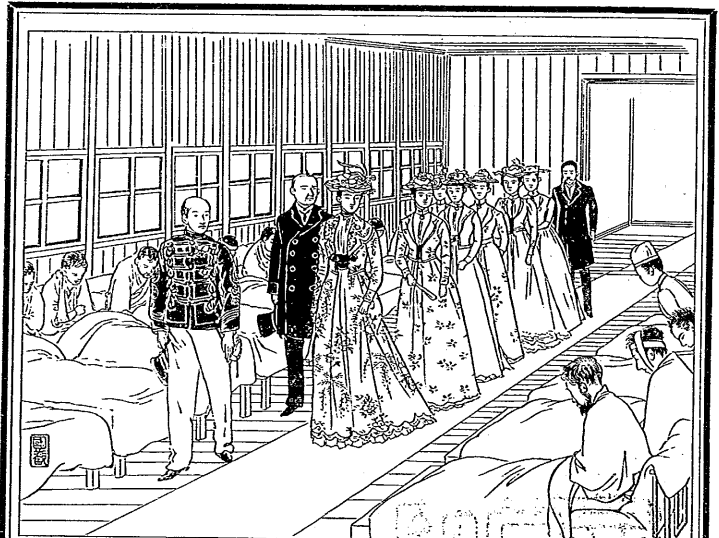
尋常小學修身書

文部省



もくろく

| | | |
|-------|----------------|-----|
| だい一 | こーごー(いか(皇后陛下)) | 一 |
| だい二 | ちーぎ | 二 |
| だい三 | そせん(祖先) | 三 |
| だい四 | こーこー | 五 |
| だい五 | きんべん(勤勉) | 六 |
| だい六 | がくもん | 八 |
| だい七 | じえい(自營) | 九 |
| だい八 | にんたい(忍耐) | 十 |
| だい九 | ゆーき | 十二 |
| だい十 | ものごとにあわてる | 十三 |
| | な | 十三 |
| だい十一 | なんぎをこらへよ | 十五 |
| だい十二 | しーじき | 十六 |
| だい十三 | ところのとがめるこ | 十七 |
| | とをすするな | 十七 |
| だい十四 | しまんするな | 十九 |
| だい十五 | どりー(度量)を | 二十一 |
| | 大きくせよ | 二十一 |
| だい十六 | けんこー(健康) | 二十二 |
| だい十七 | けんやく | 二十三 |
| だい十八 | じぜん(慈善) | 二十五 |
| だい十九 | めしつかひをあ | 二十七 |
| | はれめ | 二十七 |
| だい二十 | おんをわすれる | 二十八 |
| | な | 二十八 |
| だい二十一 | ともだち | 三十 |
| だい二十二 | 人をそねむな | 三十一 |
| だい二十三 | れいぎ | 三十三 |
| だい二十四 | あづかりもの | 三十六 |
| だい二十五 | きんじよの人 | 三十七 |
| だい二十六 | こーえき(公益) | 三十九 |
| だい二十七 | ふくしー(復習) | 四十 |



だい一
こーごーへいかは、
ひーいんにおいで
になって、けがをした
ぐんじんや、びーき
になったぐんじんを、
おみまひになりま
した。みなみなたい

そ、ありがたがりました。

だい二



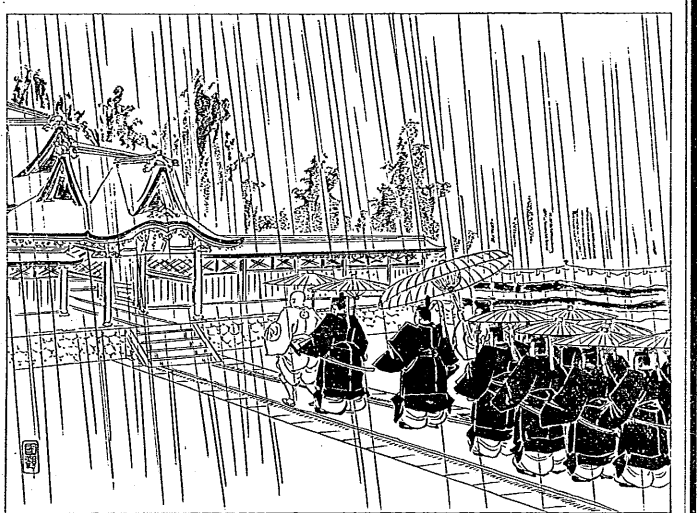
明治十年に、カゴシマのぞくが、クマモトの
しろをかこんだとき、しろの中からは、こち
らのよーすを、とほくのか
んぐんに、しらせようと、
おもって、そのつかひを、
谷村計介に、いひつけ

ました。計介は、いろ
いろのなんぎをし
て、とーとー、そのつ
かひをしとげまし
た。

だい三



徳川吉宗は、家康をまつてあるお宮にまゐ
る日には、どんなに、雨がふっても、きつとまゐり



ました。またあると
し、家康のたんじょー
日に、けらいをあつ
めて、そせんのが
らをはなしてきか
せました。
そせんを、たつとばね
ばなりません。

だい四

二宮金次郎は、小さいとき、わらぢをつく
て、おとうさんのので、だすけを
しました。
おとうさんが
なくなつてか
らは、なはを
なつたり、たき



ぎをきったりして、それをうって、おかあさんの
てだすけをし、また、おとうとをやしなひま
した。

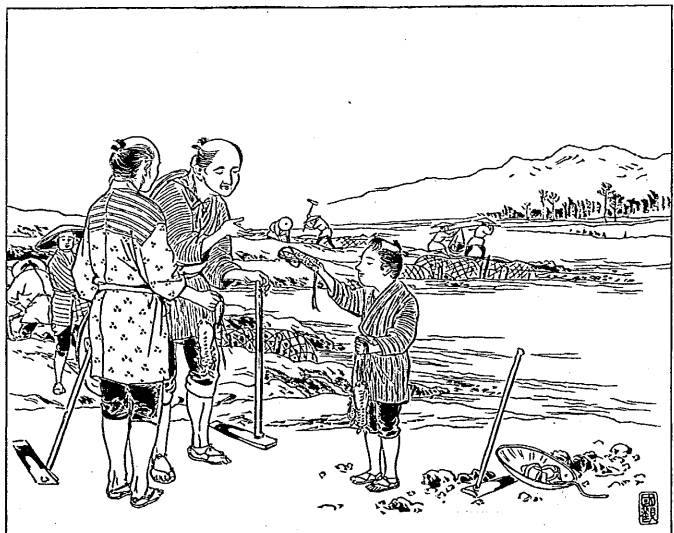
金次郎は、こーこーなこであります。

こーハ、トクノモト。

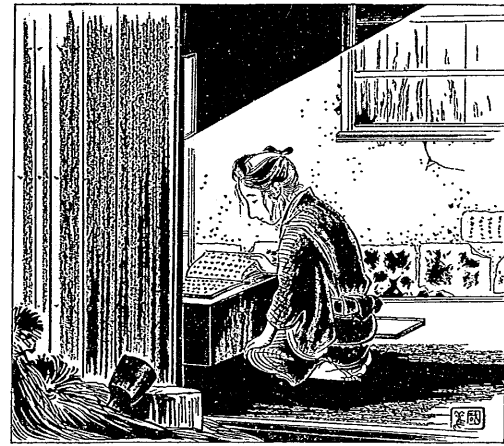
だい五

金次郎は、十二のとき、どてのふしんにでま
した。力がたらんので、ほかの人のせわにな

りましたから、わら
ぢをつくって、その
人たちにおくりま
した。その人たちが、
やすんでゐるあひ
だにも、じぶんは、や
すまずにはたらき
ました。



だい六



金次郎は、をぢの家におりましたとき、じぶん
で、なたねをつくらせて、た
ねあぶらと、とりかへ
て、まいばん、べんきょー
しました。をぢは「本を
よむより、うちのしご
とをせよ。」といひまし

八

たから、金次郎は、いひつけられたしごとを、
すましたあとで、べんきょーしました。

カンナンハ、人ヲタマニス。

だい七

金次郎が、じぶんの
家にかへりま
したとき、
その家は、



九



のかんたいを、一ねん
あまり、かこんでゐま
した。そのあひだ、雨が
ふっても、かぜがふいて
も、すこしもゆだんせ
ずてきのよーすに、き
をつけてゐました。そ
して、しまひに、てきを



あれは、てゐました。金次郎は、それを、じぶ
んで、なほして、すみ

ました。

金次郎は、せいだし
て、はたらいて、しま

ひには、えらい人になりました。

だい八

イギリスのたいしよー、ネルソンは、フランス

うちやぶりしました。

なにごとをするにも、しんぼーが、だいじで
あります。

だい九

後光明天皇は、かみ
なりがおきらひな
のを、なほさうとお
ほしめして、かみ



なりが、はげしくなるとき、わざと、み
すのそとに、でて、すわっておいでにな
りました。それから、かみなりのお
きらひなことが、おなほりになりました。
ゆーきを、やしなはねばなりません。

だい十

日本武尊が、えぞをごせいばつに、おいでに
なるとちゅーで、わるものどもが、のに、ひをつ

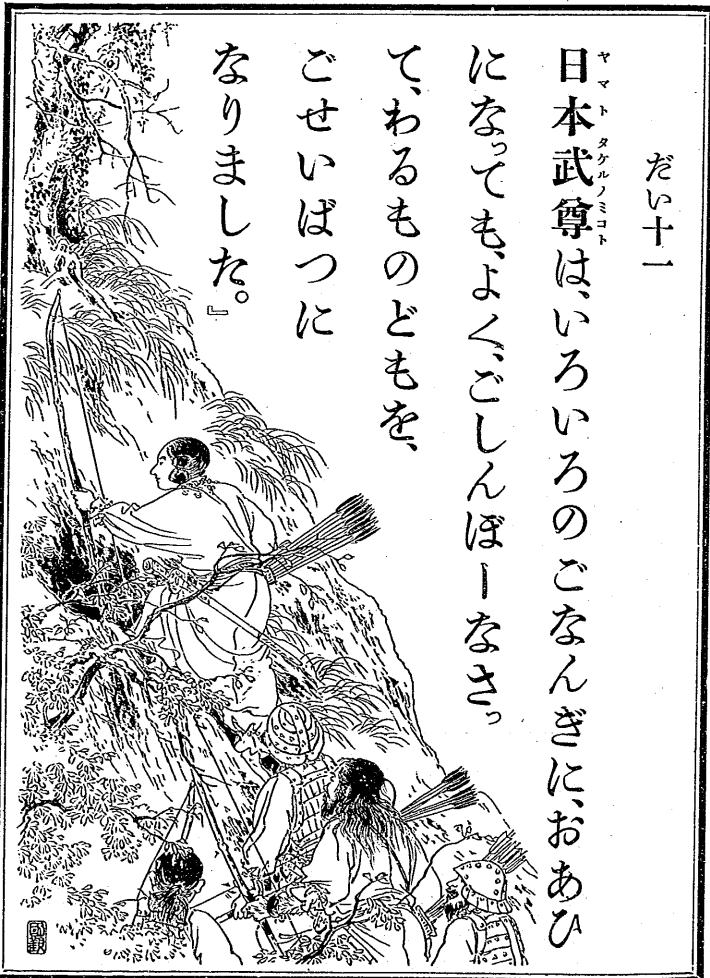


かちになりました。
 なにごとにもあわててはなりません。

けてみごとをやき
 ころさうとしまし
 た。みことは、ちと
 もあわてず、こちら
 からもひをつけて、
 わるものどもにお

だい十一

ヤマト タケルノミコト
 日本武尊は、いろいろのごなんぎにおあひ
 になつても、よくごしんぼ一なさ
 て、わるものどもを、
 ごせいばつに
 なりました。



なにごとをするにも、なんぎをこらへねば
なりません。

十六



ワシントンには
にあそびにでて、お
とうさんの、だいじ
にしてゐたさくら
の木を、きりたふし

だい十二

ました。「これは、だれがきった。」とおとうさんが、
たづねましたとき、「わたくしがきりました。」
と、かくさずに、こたへて、わびました。
おとうさんは、ワシントンのしょーじきなこ
とを、たいそし、よろこびました。

だい十三

この女のこは、おかあさんのいひつけに、そ
むいて、かひぐひをしました。あとで、あし、わ

十七

るいことをしたと、
おもって、ところがと
がめてなりません
でした。

おかあさんが、その
よーすをうたがって、
たづねましたので、
このことは、そのわけ



をはなして、わびました。
こころのところがめることを、してはなりません。
ん。

だい十四

むかし、タイマノケハヤといふ人がありま
したが、じぶんほど、力のつよいものは、ある
まい。』と、いって、じまんしてをりました。
そのときの天皇が、それをおききになって、ノ



んしてはなりません。

ミノスクネといふ人をよんで、力くらべをおさせになりましたが、ケハヤはまけました。
 力がつよくても、がくもんができて、しま

だい十五

むかし、^{カヒ}貝原^{バラ}益軒^{エキケン}といふ名だかいがくしやがありました。あるすのうちで、すがすまふをとって、^{エキケン}益軒のたいじにして、あたぼたんの花ををりました。では、しから



れるかと、しんぱいして、人にたのんで、わび
てもらひましたが、益軒エキケンは、すこしも、おこら
ずに、ゆるしてやりました。



だい十六

益軒エキケンは、小さいときか
ら、からだがよわいの
で、つねづね、よーじょー
をしました。それで、じょーぶになって、八十五ま

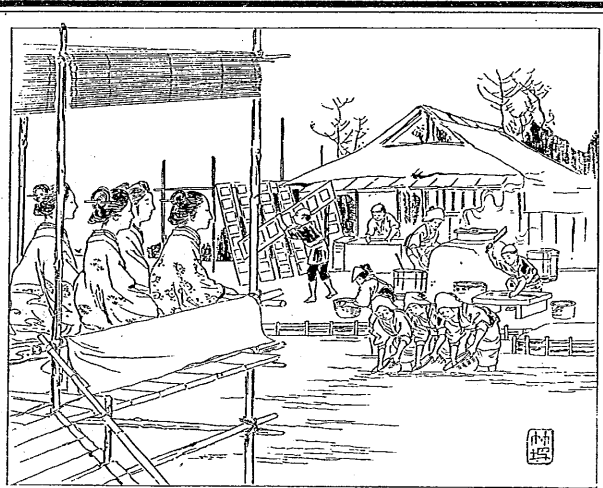
でもながいきしました。

けんこーは、たいせつであります。

ジューブナココロハ、ジューブナカラダニ、ヤ
ドル。

だい十七

徳川光圀トクガハミツクニは、じょちゅーたちが紙をそまつにす
るので、紙すきはを見せにやりました。じょちゅ
ーたちは、紙すき女が、ふゆのさむい日に、水



の中で、はたらいてゐるのを見て、紙すきの
 しごとの、なんぎなこ
 とをさとりました。そ
 れから紙を、たいせつ
 に、つかふよーになり
 ました。
 ものを、むえきにつか
 てはなりません。

だい十八

鈴木^{スズキ}今^{イマ}右^{ウエ}衛^{ヱン}門^{モン}ふーふは、なさけぶかい人で
 ありました。そのこに、十二になるむすめが
 ありましたが、あるさむい日、おなじとしご
 ろの女のこが、ものもらひにきました。今^{イマ}右^{ウエ}
 衛^{ヱン}門^{モン}のつまは、むすめにむかって、「あのこは、ひ
 とへもの一まいで、ふるへてゐますが、おまへ
 のきてゐるわたいれを、一まい、ぬいでやり



なんぎな人を、すくはねばなりません。

ませんか。といひました。むすめは、おとなしく、よいほーのわたいれをぬいで、あたへましたので、今右衛門ふーふも、たいそー、よろこびました。

だい十九

田邊晋齋は、さむいばんに、ともをつれて、人の家にいきました。かへるとき、ともものものが、もんのそとに、さむさうに、たつてゐるのを見て、「あー、きのとくであつた。」といつて、いたは



りました。それからさむいばんは、なるべく、
そとへ、でんよーに、きをつけました。

めしつかひを、あはれまねばなりません。

ヨイシユジンノモトニ、ヨイメシツカヒア
リ。

だい二十

彌兵衛のしゅじんが、しまながしにあひまし
た。彌兵衛は、ごおんがへしは、このときだと



せつにせわをしました。

おもって、まづ、いっしん
に、ふねをこぐことを
ならひました。そして、
はるばる、しまにわたっ
て、しゅじんにあひまし
た。しゅじんが、ゆるされ
て、かへってからも、しん



伊藤冠峰と南宮大
 湫とは、なかのよい
 ともだちでありま
 した。大湫は、かぞく
 をのこして、江戸に
 いきました。が、かじ
 にあったため、かぞ

くを、よびよせることが、できませんでした。
 冠峰は、それを、きのどくに、おもって、りよひをこ
 しらへて、大湫のかぞくを、江戸まで、おくって
 やりました。
 ともだちには、しんせつに、せねばなりません。
 ん。

吉田松陰のでしに、高杉と久坂といふ二人



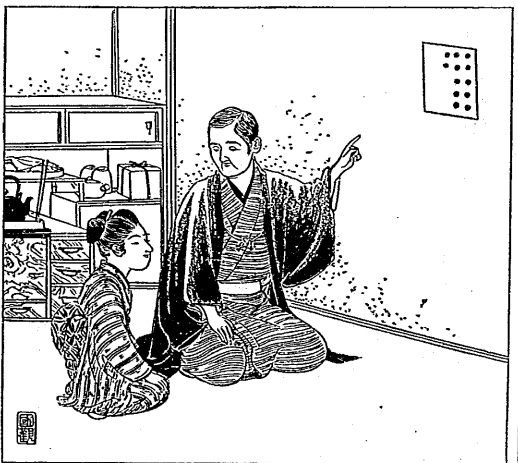
のしよせいがありました。高杉は、べんきょーし
 ませんから、松陰は、つ
 ねに、久坂をほめて、高
 杉をいましめました。
 高杉は、それから、よく
 べんきょーして、がくも
 んが、すすみましたの
 で、松陰は、高杉をほめ

て、なにことも、高杉とそーだんするよーに
 なりました。それでも、久坂は、けっして、高杉を
 そねまずに、「高杉くんは、えらい人だ。」と、いって
 りました。高杉も、「久坂くんは、りっぱな人だ。」と、
 ほめてゐました。松陰は、このことをきいて、
 たいそー、よろこびました。
 人を、そねんではなりません。

あるところに、一人のむすめがありました。八さいになっても、れいぎをまもりませんから、おとうさんは、どうかして、それをなほしたいと、おもひました。

ある日、おとうさんは、むすめをよびよせて、れいぎのたいせつなことををしへ、そして、一まいの紙をかべにはりつけさせて、むすめが、いやしいことばづかひや、ぶさほーな

ふるまひをするたびに、その紙に、くろぼしをつけることにしました。としのくれになつて、むすめに、そのかづをかぞへさせて、いましめました。むすめは、それから、だんだん、れいぎをまもるよーになつて、とーとー、一つの



くろぼしもつかんよーになりました。

だい二十四

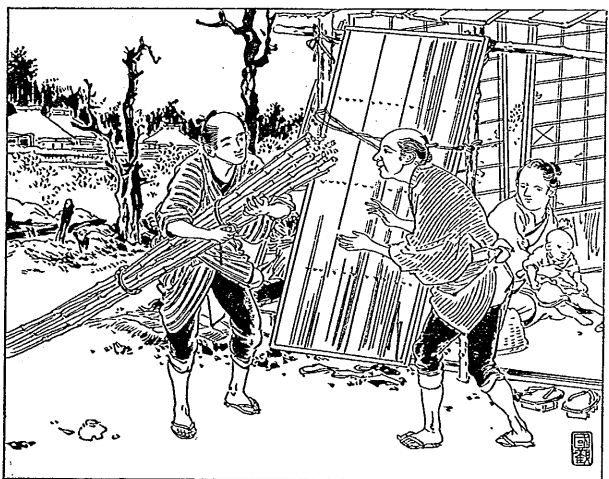
太郎は、じぶんのうちに、あづかったかうもりがさをさして、でかけようと思いました。ねえさんは、それをとめて、「それは、あづかりものであるから、かってにつかってはなりません。じぶんのを、おさしなさい。」といひました。太郎は、ねえさんのいふことをきいて、そのかさ



ません。

だい二十五

を、もとのところに、しまつて、じぶんのかさをさして、いきました。
あづかりものを、かってにつかっではなり



佐太郎は、きんじよの人たちにしんせつをつくしました。あるとき、きんじよの人の家のやねが、やぶれてゐるのを見て、村の人たちから、わらをもらってやって、それをなほさせました。また、かじにあっ

た人には、たけをきって、あたへました。きんじよの人は、なかよくして、たすけあはねばなりません。

だい二十六

佐太郎の村に、どぼしがありました。が、たびたび、そんなして、村の人たちが、なんぎをしました。佐太郎は、人人とそーだんして、それを石ばしに、かけかへました。それから、こは

れることもなく、村
の人たちは、たいそ
し、よろこびました。
よのためになるこ
とをするのは、人の
つとめであります。

だいに二十七

よい日本人ちっほんじんになるには、ちゅーぎのころを



もたねばなりません。

おとうさんや、おかあさんには、こーこーを
つくし、きょーだいとは、なかよくし、ともだち
には、しんせつにしめしつかひをあはれみ、
きんじょの人には、よくつきあはねばなりま
せん。

なにごとにも、しよーじきで、ところのとがめ
るよーなことをせず、ゆーきがあつて、しんぼ

「つよくものごとにあわてんよーにし、じぶんのことは、じぶんでし、そして、なんぎをこらへねばなりません。また、からだをじよーぶにし、けんやくをまもってしごとにし、せいださねばなりません。

そのほか、れいぎをまもり、じまんをせず、おんをうけては、わすれんよーにし、人をそねむよーなことなく、どりよーを大きくし、人の

ものを、だいじにせねばなりません。

かよーに、じぶんのおこなひをつつしんで、よく、人にまじはり、そのうへよのため、人のために、つくすよーに、こころがけると、よい日本人にっぽんじんになれます。

をはり

CU 130.1

13

明治三十六年十一月七日印刷
明治三十六年十一月九日發行

非賣品

著作權所有

著作兼
發行者

文部省

印刷者
印刷局